

童蒙をく草

二編

五

大尾

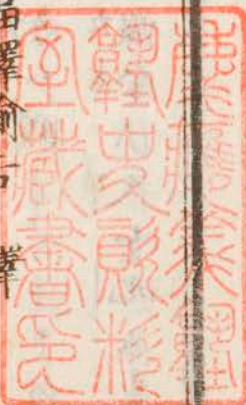


童蒙と一へ草卷の五

第二十七章大量ある事

人或ハ心の狭き者なり些細の事亦人の不調法を見出さ
んことさぐりながら其の失禮をもこそを見て咎めんこと世
間の人と同ト職業をもちバ同職の人を羨み其繁昌をを
嫉み一度人小辱しめたりとつらも永き月日を経るバ
忘るべき筈ある小深くこそ成心の底小舎で時々は其意
趣を返さんとせむるおど如何小も賤しむべく又惡むべき舉

福澤諭吉 譯



動あり心廣き人の舉動ハ全くこも不異あり他人の失禮を
るを見てこも浅心不留めを或ハ怒ることあるも怒ること
を忘れて痕なく我身ハ不幸なるも他人の繁昌を見れば
こも浅悦び事を為さず當てハ他人と争ひ競えざらんハ非
ざるども其争ふや自ぬ賤一かたきより人の心を推察し
て一々其舉動を咎め或ハ粗忽にして罪を犯し我身不害
を及ばざること甚だしき者なりと雖ども其罪を赦して問
を何等の事故なるも權謀術數なく賤一き策畧を以て自
の趣意を達せんと思ふことなく人の身ハ賤一くもその
心正しけむバこも浅辱むることなく假令一人を叱るも

人を惡むことありこも浅一ハ小云へバ其氣分常不安ら
なりて他人の身を害し他人の物を奪ふなどの心ハ從て
も起らざるものありこも浅大量の徳義といふ實ふ世小稀
あり徳義ふてこも浅貴まざる者ハあり

いすせどあやの君ひをらふ言止しけむ小近來國中の

或人すせどあやの君ひをらふ言止しけむ小近來國中の

學者其様々の言を流して君の評判をばくする者少なり

ふむこも浅ひ事ハ寛仁大量のひでつばりき顔色をも為

ふむこも浅ひ事ハ寛仁大量のひでつばりき顔色をも為

否小由てなることなり其流言を咎るよりも余が身を慎む

又或一人の家来君を謗りたる由りこも成追放し給ふべしと勸る者なり。小君の云く先づ急ぐ事なり。或は我より彼の者を促がして斯る粗言を吐く。めりやも知れず。色々と詮索せし。小案の如く此家来ハ嘗て君のため小功を成して褒美を得たり。者ありけむ。君ハ大に後悔彼の罪小なり。余が罪あり。即ち刻こも小褒美を賜ふ。たりとぞ。

（ろ）うあるまむとびどろひんの事

紀元千六百年の時代英吉利小内乱なり。其國王なる第二

世にむを世に出し第三世うあるまむ代て國王の位小即きり。國中ハ觸を出して先の王と音信を通ずる者ハ大逆の罪なり。その旨を布告たり。ききとも國の貴族等ハ私小せんむと文通する者多く其中小むとるひんといへる貴族ハ兼て正しき人物あり。一筋小せんむ。その方へ左祖し度々密書の往復なり。て國王うあるまむの聞小達しけむ。或日うあるまむこの人を内談の坐鋪へ召し探得たり。密書を出してこも示し國の大法を犯し。小宜しからざることも先君を慕ふの義氣ハ感する。小余なり。願くハ汝が如き人物を以て余が朋友と爲したる

ものありて其密書を眼の前みて焼棄この度の事を心
頭お拭けざるの證據を示しけりバ流石のごとくひへも王
の大量小心を奪つて以前の操を改めてこそ不従ひ腹心の
家来とありてぞ

はゞむうねらせりへの事

よむうねらせりハ佛蘭西小稀なる美人あり又この時
小へとて名高き醫師ありて彼の美人小親と相互
の戀慕もども双方の身が不釣合なるため夫婦の約束
も出来なく醫師も自かこも思切らんとて婦人の
家小迫つらざること數年ありて或時婦人病小罹りて格

別の容体小ハちとされど刺絡とべき病症なるゆゑ彼の医
師を招待してこそ成頼となり醫師ハ久し振小て婦人小逢
ひ魂も空小飛ぶなりて狼狽之余小脈の筋を取違へ
動脈を刺しなりけりハ出血の甚だしきハ勿論命も危き不
とある小婦人ハ更小驚く色もあらず三日を経てハよくむ
づりき容体とあり腕を切落されバ養生も叶ひ難き場
合小至りたれども醫師小對して不足なる顔色をも顯さ
ざるも其療治を求めけりハ病症ハよく進み最早一昼
一夜の間小命も終るべき難症小陥り醫師の心苦しきハ
へん方小胸を割き腸を断つと思を為し心配しけりハ病

醫師の顔色を見てゐても助かるべき路も何とぞと悟
家内の者へ遺言―終つて傍の人を拂ひ醫師を枕下と呼
でこもつ告げて云く最早この世の暇乞ふまゝに衆も亦心の
中を告げざりべからむ君ハ斯方誤を為せしと衆ども衆
於て露をうりもこもつ涙恨と思ふも假令ひ今この世を去る
も未来ハ更ふり此世界ハ行くべきことなまに衆が身小取
してハ却て幸福あり唯残念あるハ世間の人の君を見るこ
と衆が君を思ふが如くあつて或ハこの度の一条小由
も君が家業の名を落しことも何ふんうと思残しことハ唯
この一事の故ハ衆ハ成るだけ君の心配を少ふくせんが

ため小遺言の中ハも其次弟を記せしことありこの世の縁
もこもつ限り随分よめ小暮し給つとて死生の別を告げたり
あり
婦人の死後小至て其遺言の書面を改めしハ大造ある遺物
を此醫師へ遺し與ふるとの次第と記せりをもくこの婦人
の死したるハ全く醫師の肝為ふまゝとも其實ハ罪ある小非
む其罪ふまゝ知りて斯く取扱ひしハ婦人の大量美德とい
ふべきあり

② 若き画工三人の事

伊太里小名高き画を學ぶ學校よりて稽古する者甚と多し

其稽古人の内小がいとつとある者或は此画をかき小見
事小出来て先生方も皆にきく驚きこの様子ふて追々執行
と遂げふハ行末ハ必を銘人ふもあふべしとてこも成譽め
ざる者ハあり

然る小この學校ふ二人の稽古人よりて一人をふろぬる
ひひ一人をろきんとひひ二人ともがいとつとの友達
りーダこの度の画のことふ付き兩人の思ふ所大ハ異あり
ふろぬるハがいとつとよりも少先輩ふて画も相應不出
來る者ありーダ彼のがいとつとの画を見て大ハ力を落
こきうで画のためふハ自分も評判を取てーことふきとも

朋輩の内小一段たちろダり者よりてハ己ハ譽も衰ふる
ことありんと賤しき心を抱きて只管がいとつとを悪く何
とて彼ハ評判をとりくせんものと思ひぬきとも彼
の画ハ實ふり出来ふて既ハ諸先生も譽めーことふきハ
今更にも出出来ありとて謗るべき由もろくむ乃ち
き工夫を運らー何となく言を流して彼のがいとつとの画
ハ自分一人ふてかきーものふろくを或る先生の加勢ふ由
て一時の評判を取てーことふきとも其實ハ僥幸ありと云
觸らーけり

ふき小引替へるきんぞハいりる年若き書生ふきともが

どつとが画の巧みを見分け心の中より感服してこそ成
 稱美すること限ふ諸方にて彼の画の評判高けきハとき
 を聞く不就ても何卒斯る画工ありたきりのと思ひ頻
 出精して怠ることあり固よりがどつとの上お出んとハ
 敢て望む所ありざれども唯願くハ同様の者おあらんと
 て一筋ふこの人を目當ふて己が藝を研きがどつとの
 ことを口おさへ云へばいつともこまを譽めきることあり彼
 の「ぶろねろ」色々と言を構へてがどつとを諺るを聞き
 常おこまを堪へ難く思へり
 右の如くろきんをハ一心一向お画の藝を研き毎日稽古の

場所へ通ふ人も人より前小行き人より後小歸り家小歸り
 ても徒小時を費さず唯稽古の身を委ねけきどもハ
 だ其藝を以て自かつ満足せむ幾度とふく試みてハ又試
 或ハ躬かゝ自かつの画を見くさてく及むざることあり此画
 を以てがどつとの筆お較べあは其及むざること幾段お
 るべきやふと歎息せいかどのことありが月日を重ね
 るに従ひ次第お上達して自かつハ満足し世間の
 人も其画を譽る者少かりとむ乃ち又躬り力を附て云く
 余も人ありがどつとも人あり何ぞ必むもこまお及ぶ
 べうとざるの理もあらずと

がいつとハヤミ上達して今ハ學校の中ふても其右小
出る者なくあらねるも一時ハこまじく覽ひりども速も及
まぬことゝなりき唯がいつとの画を見せバ安ふこと
を訪てりき評のミして自かゝ其藝の拙き成覆えんとの
ミレちふろきんぞハ絶て議論を好む人への知らざる愚
ふて獨り其藝を研き自分のかき画をバがいつとの画
の傍へ持来りことなり
この學校の仕来ふて一年ハ一度稽古人の画を坐鋪へ掛け
諸先生の監定ふて其甲乙を取極り最上の者へ褒美を與ふ
ることなりこま成画の展覽といふがいつとも此度の展

覽へ持出さんとして力を盡して一枚の画をかき當日の前晚
小至り漸く成就して其仕揚小色をよくもるなり脂を引き
其より彼の坐鋪小拭けて明朝の展覽小供へたり然る小ぶ
ろねろハがいつとが去る一跡ふて竊小坐鋪へ入て其画
小何々腐蝕藥とふりかちて敢々小こま成残ひりて其惡む
べき野業あり

ろきんども同トく力を盡して画を作て其心願ハ唯がいつ
つとの画よりなり下小落ちざりやうふと思ふのミ
叔その夜も明て當日の朝小至り廣く明り大廣間へ諸先
生も追々入来り拭並べたる画を次第次第小見分けて何

もがいどつとの作ハ格別見事あつんと初より心の中お待
ちふけ居たり。豈圖らんや画の面煙の如く村雲の如
くして生たる筆意とてハ少しも見へざりけきバ諸先生も
案ハ相違。こハ同人の作ハ非らざらべ。とて唯驚くを
うたり。がいどつとも此様と見て齒をかし腕をふきりて
憤ふきども更せん方も。う。と唯惡むべきハ彼のふるぬ
ろ。たり。を。ゆ。たり。と。獨り座鋪の隅。て他人の心配
と見て心小悦ひ居たり。う。と不敵あきられ小引替へるま
ぞ。ハ本人より。も却て心をいたし。め大音揚てこハ人の所
為あり。こハ人の惡計あり。諸先生もよく見給へ。其の画ハ

いどつとの作ハ。う。と。余ハ同人の画の。を。成。て。死
一見。たり。こ。其見事あり。こと譬へんか。と。今。こ
画。て。其周囲の筆意と見て。斯く。疵。付。か。ざり。以前。の。巧
拙を判断。給ふべ。と。唯獨。て。て。頼。ふ。其言。譯。を。為。せ。り
見物の人々も。皆。ろ。多。ん。ど。が。大量。ある。誠。感。ト。且。ハ。が。い。ど。つ
との不幸と氣の毒ハ思へども。常日の規則。て。何。分。ハ。め
斯く。きた。あ。き。作。へ。褒。美。を。與。ふ。る。こと。も。出来。兼。尚。其。外。の。世
を見。分。せ。し。小。衆。評。ハ。由。て。ろ。多。ん。ど。の。作。を。第一。と。定。めて。こ
ま。ふ。當日の褒。美。を。與。へ。たり。然。ろ。ふ。ろ。多。ん。ど。ハ。一。旦。こ。の。褒
美の品を受取り。直。ふ。こ。ま。成。が。い。ど。つ。と。へ。授。けて。云。く。云。の

品ハ余ダ取るべきもの小何々を君一君の画小賤一き舉動
 を爲せ一君もかくバこの褒美ハ固より君ダ手小落るここ
 疑も何々を假令ハ然るときふも君ハ第一小一て余ハ直小
 君の次々まバ余ダ身小於て何の面目々こき小若うんこの
 後余も出精一て君と等を同ふもの望あき小何々をされい
 も唯公け小藝と驚ふべきのこかりをぬ小も鄙劣なる舉動
 小陷ることふうん是余ハ心の中の實ありと
 監定の諸先生もろきんぞダ仕打と見てこきを譽めざる者
 々々ハ何々を遂小一同相談のヒふてこの度限も同様の褒
 美を一通り弄出さこころ小決定一て其ハがどつとダ此

の巧なるがためふこき成興へ其ハろきんぞダ徳義の美
 ずるがためふかれと興ふ一々々當日の事を終て一と度

⑤ 腹大の煩を一き事

ふらん一をといへる子供その先生小伴ハ或村を通行せ
 折一も二三足の腹大恐ろ一き氣色ふてこき小吠獄り或ハ
 咬付かん一或ハ飛甘かん一其煩を一き小鳴へてふ
 らん一をハ杖と振廻一或ハ石を拾ふてこきを追へバ直小
 逃去きども振返りて二三問も歩りバ又後より附来てこき
 と如何ともまぐぬき兎角まる間小或ハ百姓家の知の鬼
 々で来て彼腹大も去りたり然るふこの畑の傍小肥え

太うたる一疋の飼犬ひあゝうかうして眠り居たまふらんしは復と大に恐る先生の側ふより付て其處を通り過ぎふ犬はゆうくとして此方を見向きもせざりけや
 兩人ハ又進で鳥獸を飼ふ原ふ至て一匹の鷺鳥人を
 見て鳴き騒ぎ何事も長き頸を揚て兩人の方へ向ひ来る其
 有様ありくもろく又馬鹿らくも見へけきばふらん
 ても笑ひあぐら杖をもて一寸其頸を打ち其より通り過ぎ
 て心く先きの方へ至きばくハ數疋の牝牛一疋の牝
 牛小伴ふて群居たりあらんしは又少く恐る様子
 ありくども牛ハ平氣ふて草を喰ひ其頭ども揚げざりけ

り
 先づこの處も無事を通り過てあらんしは先生に向ひ彼の
 の飼犬も牝牛もあゝくして鷺鳥腹犬の如くあざざり
 一ハ實お仕合ありくさやあぐら同ト畜類ふて斯く相違
 たりハ何故ふるやと尋ねけきバ先生の云く都て弱く賤
 き畜類ハ自分の身小頼むべき力もあく勇氣もあさやあ始
 終他の者より害を加へらきんこと代恐る我より先お他を
 犯して身の災難を遁きんと思ひ動もせバ何物も向ても
 騒ぐく敵對をることあきども其實ハ憶病ふく相手の
 ものを恐るくありきも引替へ自分の身を護るだけ力

を備ふる畜類ハ己ダ身を頼みて他のものを疑わざる也
あいつも平氣ふして身分の位を失わざるなりといハ唯畜類
の之あつども人も亦然り弱く賤き人物ハ常ハ他人を猜ひ
其顔色つらも不平あり自分より立上る者ハ忌むバこそ其恐
きて妄言詈罵憶病の餘りハ相手の人へ失禮をも加へて
只管身構をせんとするものあり唯大量の君子ハ然らざる
の心常ハ静ふして人を犯さず人を害することなく人ハ害
せらるゝあともなく或ハ僅ハ害を被ることあるもこも氏捨
て問も其故ハ假令ハ害を被るゝ遽ハ彼是よりしてあま
を取れざるも元自分の身ハ頼むべき力量ある由り

何時ふても然る人と思ふるは小事の条理を取れさんと
する覺悟のまあり

（一）いれあひの奉行の事

兩國戦争ふ及ぶるに互ハ互ハ力を盡して双方の害を為し或
ハ軍勢を出して敵の國を荒らし人を殺し物を不捕し或ハ
軍艦を出して敵の船を打碎くなど乱妨狼藉至らざる所不
し斯く双方の人氣荒立ち惡事を犯す其中ハ敵ハ對して正
しく事を行ひこゝに深切を絶さんとする者ハ實ハ大量の
人物といふべきなり

頃ハ紀元千七百四十六年英吉利と西班牙との間ハ戦争起

互に軍艦を出して双方の船を打碎かんとする折しも
人との商賈船を悉く捕縛し船多く荷物を積み
西印度の島や山々をめぐりての間を通るに船の底を
損破して水船と爲ししるふ由り乗組の者ハ唯その命を救
んがためきつたの港をわかれ乗組もたゞこの處へ即ち西
班牙の領ありしハ乗組一同の者も身ハ停とあり船も不捕
ふありことありしと固より覺悟を極め船將先づ上陸し
港の奉行に面會し船ハ固より引渡さるべきとも乗組の人
數はけハ假令い停とありしもの取扱を寛み爲し給ふるべ
しと請ひしにハ案ハ相違し奉行ハこの船を受取らむとて

云く君の船若し戦争のためふこの港へ入りしことありしハ
此處を不捕とせんきハ當然なれども唯是商賈船の難船一丸
もの小て君等ハ漂流人ハ等しき難波あり身あり余ハ心
み於てハ當ふことと害せざるの事ありしに或は助けざ
る可らむ故に乗組の人ハ安んじてこの港に止り今日より
船の修費を取掛り或ハ修費の入用と拂ふがなりハ荷物を
賣るも勝手なりとく修費出来の上ハ何時もても自由に出
帆しむること我西班牙の船に異ふところありしと
右の次第にて船の修費も出来て出帆せんとするに奉行
ハ尚も心とる人々印鑑を作り近海にて西班牙の軍艦不行

逢ふことあるも此の船小害を加ふ可らむとの旨を記し
の印鑑を渡し船を送出せり
右の如く思ふべきを思ふぬ不幸の中不幸を得て難ふく
ろんどんへ歸りハ全く「そわふ」の奉行の大量小由て出来
ることあり

第二十八章武勇の事

危き所恐るるを以てこそ小向ふ者と武勇の人と云ふ事の趣
意宜しき小叶へバ勇氣を振ふて危き小向ふを良しと譬へ
バ同類の人の災難を救ふて其死を免るるを或ハ強盗と
防て自分の命と物とを護り或ハ敵の軍勢を追拂うて我々

國を守らるる如きハ何れも趣意の宜しきものありて去るが爲
ふバ勇氣を振ひ危き所犯して憚ることかたを良しとるる
趣意もども事の趣意宜しからざるれば假令ハ勇氣を振
ふもこそは譬ふ足らざる譬へバ物を奪はんがため小働
強盗ハ強くして勇氣は多く徒ハ他國を害せんがため小
攻へる所の軍勢も亦強くして勇氣は多くと雖どもこハ
唯その勦の猛きのとふてこそハ武勇といふ可らざる者
武勇の大將とて名高き人とはども其實ハ武勇ありざる者
多し假令ハ軍小ハ勝つと雖どもその軍の趣意宜しからざ
るバ貞の武將とハ云ふ可らざるなり

い
くまをたてんとく
の事

千八百三十八年の九月、不^ふ可^こ思^しふ事^{こと}もあ^あり、^あつ^つて^て蒸^{じょう}氣^き船^{せん}英^{えい}吉利^{きり}の^の船^{ふね}を^を沈^{しづ}め^める^るに^に、^{きん}海^{かい}ふ^て大^{だい}風^{ふう}が^が逢^あひ^ひつ^つた^たため^めに、^ふ船^{ふね}の^の作^{さく}も^も堅^かく^く、^ま且^{かつ}蒸^{じょう}氣^きの^の器^き械^{かい}も^も整^{ととの}え^えざ^ざり^り、^あた^ため^めに^に、^あ波^{なみ}風^{ふう}が^が堪^たへ^へず^ず、^あ遂^{つい}に^に、^あ船^{ふね}は^は碎^{くず}れて^て、^あ衆^{しゅう}組^{ぐみ}の^の人^{ひと}數^{かず}も^も海^{うみ}に^に溺^{おぼ}れ^れ、^あ者^{もの}多^{おほく}く^く一^{ひとり}人^{ひとり}も^もた^たを^をか^かる^るべ^{べき}き^き様^{よう}子^しに^に見^みえ^えず^ずり^りあり^り。

この岩山お遊いそやまきのふきさんだらんとつゝ處ところふ燈明臺とうめいだいなり
 其番人きばんじんはだるさんぐある者ものふて一家内共ふ燈明臺とうめいだいの下した
 小住居こぞうたりたりこの風雨ふううの曉あけふ彼のげきへともるかを

の方を助けハ一艘の蒸氣船荒き浪も亦今も碎けて
 沈むべき有様あり番人ハ所持の小舟にてこそ助けんと
 一旦ハ思立ちしふきど彼の恐るる浪風を見てハとても
 叶ふことありとて又思止り如何ハせんと思案の折柄二
 十二歳の娘々きいも女ふぐりも父小勸て共小舟小乗り自
 かも撓をかして助ふ赴かんといふ親父も力を得て親子
 共小舟小乗り山の如き大浪の間をくぐりて遂小本船の
 處よりぞらぎつけ九人の人を救ふて小舟小乗せ難ふく燈明
 臺へ歸り様々小手當して命を全ふるを得たり
 右九人の外小助かりたる者ハ一人も何ふなきはバとの娘

の武勇ふりせハ九人の者も空しく海に沈む一答あるハ
疑ふべきふらふを唯一筋ある真心ふて人の死を傍よ
り観るふ忍びぞ身を殺しても同類の人を救ふんとするの
働ふ由て功德を成したるあり

とよりりて娘の評判天下に響き渡り世の人口を開けバ
是を譽めざる者あり画工寫真師ハもてて燈明臺の家ふ
乗りて娘の寫真を取り似顔と書き或ハ其難船を救ひしと
きの有様を画小寫を者り國中歴々の人ハ手紙を認めて
この娘小贈り其手柄を譽る者もり或ハ諸人相談の上六
百とんと余の金を出合せてこも小贈りし者もり其面目

盛ありといふべしやもく古よりこの娘を爲せしことの事
ふらふざるも一度世に功を立てし者ハ數十歳の今日に至
るまでも世上に其名を忘るることありさきとバ今この娘の
武勇も其芳しき名を數千歳の後流れて朽ることありる
べし

斯く勇しき娘あきども自か謙退する徳義も亦人小優
たること神妙ある世間小自分の評判高きを聞き却て驚て
云く余ハ唯當然の事を爲したるのみ非常の働りるふ非と

三 瓦師の子たむの事

兵吉利の國より名をとるのどくとも名いけん親しく自

かの見し事ありきて左の話を記せり

この里ふ一人の職人なり焼瓦を積立てを以て家業とふ

随分うに職人ふきども酒を好み毎日稼きたる錢ハ皆こを

と酒屋お費して一文でも残さず妻子ハ唯銘々の働いて喰

ふすくふ捨置きいさうりもこをを顧ることにふ誠不言

語ふ絶えたり次第ふきども如何おせん職人ふきふハ珍ら

しくぬことなり

右の次第ふてこの職人の妻子も飢寒の難儀小陥るき場

合あり一が唯長子のたむを頼ふして一家内の患を免くを

たうやもくこのたむある者ハ幼少のより父の手小就

て居る職の手傳お使ひも早く其仕事を覺へて十三四歳の

より父ハ相應ふに債錢と取るがどふあうけはバ己が取

る一錢をバ成丈け父お渡さぬやうおして自分の手小握を

ハ些細のもゝ錢でも盡く母お與へて家内の費は用を

やうおせり或ハ彼の畜生お等しき父が酒お酔て家お歸り

太平樂を唱へて人を罵る母も子供もこを打もんこを以

恐めて其側お寄付き得ざるやれおもたむよりそハ近く其

左右お寄りきひ言葉を和らげ顔色を尋らかふて様々お

慰め遂お床お引へてく撫つお休息せしむるおど唯獨りお

て心配をかの世もくをを懐び養ふも日向おもたむハこ

の家いへの心こころ捧たもたりてこそ我われ愛あいするこそ道理ことわりあり
或ある日ひたむハ仕事しごとお行きあつくひと頭かしらお載のせて高たかき梯子はしを
上のぼるも足あしをふもろくして下くだお積たかきたる古尾ふるおの上うへお落おち
腰骨こしほねとまゝ、かお打うちて惣身血しんちお涿さと氣絶きせつ一ひとけもバ其場そのばお
在ある合あふくも驚おどろき走集しゅうしふして先まづづ面おもてお水みづを吹代ふきしろおとて介かい
抱かかふせし漸しだく呼吸こそくを吹返ふきかへして周圍しゅういを見廻みまわり一ひとけもあ聲こゑ
おて泣なて云いふたうり少すこふき母ははの身みハ如何いかあるべきやと
叔怪しやくがい我われ人ひとをハ家いえお連歸れんきり醫師いしを呼よび療治りょうぢをち折柄しやうがも母ははハ
こそお抱付いだけぬをうもふて泣なつ叫こゑびつ狂氣きやうきのかくまうけ
をバたむハ苦痛くるうの顔色かおいろを見せどく母ははお向むかひ痛いたく泣なき給たまふ

ふあふ必かならずも全快ぜんかいして又働またはたらくやうふあふ人ひとこそ療治りょうぢを終おひ
るよとのやうの間まお痛いたきとも苦くるきとも唯一ただひと言ことの言葉ことばもあ
かりしと云いふ
たむハ賤いやしき職人しやくじんの子こおて固こより讀よむことも書かくことも
知しらざる者ものおまじも余よが説せつを以もつて評ひやうをまバふも武勇ぶゆうの
人ひとと云いふさう可べらむ

第二十九章我われ本國ほんこくを重んむる事

我身われみの生なきて成長せいせいせし所の本國ほんこくを重んむるハ天然てんぜんの人情にんじやう
あり假令たとひ其國そのくにの民たみハ開ひらけまうて蠻野ばんやあるも假令たとひ其國そのくに
柄がらハ賤いやしき他國たこくの人ひとの目めを以もつて見みまバつちやうぬやう

小思々々々々も其本國の人小於てハ自カクこそと重んぜ
ざる者ハこれと報國の心と以テ報國の心もこそハ程こ
くして道理の圍の内小繋ぎかくまたハ大小益々々ものか
て報國の心ハ人皆其國の土地と大切ハ一假令ハ主
あら地面ふてもこそと粗略小思ふことナリこの心ハ
外國の敵を防ぐハ勇氣を生ト國中一般の爲と思ふて同國
の人々互ハ相親一むの情を生ズ一譬へハ和蘭の人ハ他
の國よりハ和蘭の國を重んト他國のよりハ和蘭の人を
親一と和蘭を防ぎ守るためハ一命ハ一命ハ一命ハ一命ハ
和蘭の繁昌を頼ヒ和蘭人の幸福を祈るハ一其政府ハ和

深切の心を抱くハ和蘭國の政府あるハ故あり其國の掟を
評議一宗旨の教を進り世間の萬事を取扱ふがためハ行
るハ其の政度風俗を良とをもハ和蘭國の政度風俗あるハ
故あり右の次第を以て和蘭の人ハ太平無事の民と爲りて
政府ハ逆ふことハなく人々互ハ力を合セ心を同ふ一そ
國の繁昌を致さるハ假令ハ他國の政府よりハ和蘭を支配する
ことハナシハ假令ハ其政度風俗ハ一ハカトナリて其本國ハ
よく相應とともハ和蘭の人ハ決一てこそハ歸服せざるハ
本國を重んずるの心ハ上ハ記せし如くこそハ程よくこそ
ハ大小益々々と雖とも若一其度ハ過て道理を頼とざるハ

至るや然ハこそがため害を生むること甚だ多し假令ハ我
本國を重んずるも前後を顧みざりて國の瑕瑾とあるべき
舉動はさへからむ國民の成行不害とあるべき罪を犯さる
か、是レハ報國の心ありて活るる眼あるものといふべし
我國を大切と思へばとて妄ハ他の國を賤しむべからず妄
ハ他國の人を嫌ふべしとてこゝに或一人の身の上を譬へて
云ふんふ恰も我一人を高く構へて他人ハ我ハ等しき徳義
なくし我ハ等しき面目を得べしとざるものと思ふが如
し固より正しからざる事柄ハ我國を犯さるべきハこれ
を防禦するハ論を俟ざることあるとも格別の趣意もあら

ざる我より先ハ他國を攻めんとて妄ハ兵を擧げざるや
う心を用申すべきありんや世の中ハ戦争ありきものハ
何れも万々止むを得ざるものなりと必きこれと企つべ
し又我國ハ於て産物の道を開き交易商賣の法を盛ん
し自國の利を謀るハ勿論のことあるども産物商賣の事
ハ就ハ他國を害し我國を利すべきものと思ふ所なり
他國の繁昌ハ我國の利益あり其次弟ハ何れの國ハても繁
昌さるるハ其國の人ハ富を致し我國の人の賣る物を買ふ
べき故ハ詰る所ハ我國ハ彼國と其繁昌の幸福を共ふる
るの理あるべきなり

右論を斯を一口云へば一人の身の上の規則を以て
 國の上おりてむべきなりんを人として正しき道ふさ
 へ背うざ色バ我身を愛し我利益を求るふ於て差支ひく
 雖も獨り我ためを謀るのゝあふ兼て亦同類の人を
 愛し我力ふ叶ふことなきバ他人のためをも謀らざらん
 らむ國も亦斯の如しん一國たる者ハ正しき道ふさ背
 うざ色バ自國を愛し自國の利益を求るふ於て差支あし
 雖も唯獨り自國のためを謀るのゝあふ兼て亦他國を
 親しむ力を盡し他國のためを謀りあうをめふも其不幸
 と祈るべかりき斯の如く相互ふ其うにことを祈るハ双方

のため利益あり世間の人々皆幸福を得てあうよろしく世
 を渡るるにハ我身も亦其あうよろしく人の間ふ交して其小
 其幸福を與ふるべく他の國々皆繁昌して太平無事を樂む
 されハ我國も亦繁昌して其小太平無事を樂むべきバあ
 り

いざりいさの將軍船を焼かんとせし事

往古ぎていさの内の何ぜん國の將軍てをもとくるは武
 將たきとも正しき人物おほき安小自國のためをと思
 過せし余も小理非を顧み其鄰國ふらせでもんを滅
 んと欲して頗る小工夫を運らし或日國民奇合の席あて今

富國の威勢を盛ふてらせでもんを押倒るべき一の策略
なりきども其策略極て秘密あるべきこの席めて口外さるべから
ざる願くハ列坐の面々ふて一人の人物を撰で余が相談相手
ふ命ト給ふるべしこの人若し余が策略を良とせば則ちそ
の通ずる取計ひ後の日お至り諸君お於て異論あるべから
むと云ひけきハ列坐の人ハさるべきも兼て諸人の信仰せ
る所の「なりをたひどもある者を撰で相談相手の役ふ命ト
たりてそをさぐるをハ「なりをたひどもと近く招きらるる
秘密を告て云ふやうハ今近處の港お碇船せられせでもん
の軍艦並ふきりいさ諸國の船と不意お襲ふて残らむ焼拂

ひお此國の勢なりすら盛ふありてさるべきの諸國を押
領するべきありと必定ありと「なりけきハ「なりをたひどもハ可
否の返答もさるべき彼ら寄合の席お歸り國民お告て云ふ
この國の利益を思へハ將軍の策略お若くものありと雖ど
も亦この策略わざと正しかざるものありと云ひ
けきハ列坐の人々も其事の次第を問さるて即席お評議
を變へ將軍の説を拒むたりと云々
歴史家のるるるんおきと評して云くハ歴史の中お斯く
すても驚くべき又譽むべきことハ「なりをたひども彼のさるべきの
評議おて「なりをたひどもの言を聞き義と先おして利を後

ふるべしと決したる者ハ學者ハ何れを以て尋常の國民
ふ文字を知る學者あつた義理を辨別するも當然の
ことあきども無學文盲の土民ハ固より其本國を重ん
只管國のためとの思込し者共あつた唯一言の言葉を聞
き義理ハ背くがためあつて本國の利を棄たるハ實ハこ
を神妙といふべきあり

ろ かきいの義士の事

紀元千三百年の時代英吉利王第三世「エドワード」佛蘭西
攻へりかきいの城を圍むこと一年余あつて克たむに
ためハ英吉利の兵士を失ふことも夥多しけむハ英吉利王

の怒ること一方あつた兎角を問ふ城中ハ兵糧つきてせ
んかたなく降参の儀を申入るハ英吉利王ハ容易ハこ
を聞入るを以て云く「いよく以て余ハ差圖のすくハ徒
ハ降参も許さぬけむども若しさもなくハ城内の人を盡
く殺し其物を盡くハ捕まへ」とけむハ旗本ハ列る大
將分の人もこを聞きそハ何れも慈悲なき仕方ありて
様々ハやどめハ付王ハ又勸解してさうハ一段の用捨を
以て左の如く申渡さるしとの命何れ即ち其箇条ハ城内頭
分の者六人足ハ徒跣ハ頭ハハ冠りものを着けぬ襦袢一
枚ハ首ハ縄を附け城門の鍵を以て王の前ハ出づべし然

上ハ王の心次第小この六人の者を取扱ひこきを生うる
 もこきを殺さる唯王の心小在るの鬼小角小この命の如
 く為さバ許し難き場合なきても城内小残り者共ハ其降
 参と許して命を助くべしとのことあり
 この申渡しの書面城内小来り諸人寄合の席ふてこきと讀
 りうバ何事も皆打驚き斯る情あき役前を誰り勤る者何
 らん英吉利王の無理非道何とせんかたも何れも皆唯歎
 き悲むをかりやせし列坐の内小よをさるいもでさんと
 ぱりある者何り獨り進み出で云く假令ひ今一身の血
 を流し命を失ふとも此の城下の災難を救ふて敵の乱妨を

免さしむる人ハ天小對して勤を全ふしたる者と云ふべし
 國小對して忠義を盡したる者と云ふべし余ハ余が首を以
 て英吉利王小渡しかき此の城の償と為さんしと列坐の人
 もこの口上を聞き誰り心を動かしらん涙と血を聲を發
 して其義心小感ぜざる者小他小又五人の義士何りてび
 以るが舉動を見てさるるざしと立て共小身を棄て其難
 を與ふせんして英吉利王の差圖小任せきしあき支度調へ
 て城外へ出行きたりともく此時の支度人の目小みだきこ
 ないきとも其實を考ふきバ大人貴族の装束を著るよりも
 身の面目と云ふべきあり

叔六人の義士ハ襦袢一校徒跳はなつて冠かんりものともかぶらば
首くび小繩こじゆを附つけて英吉利王いぎりぎおうの前まへ小引出ひきださる一命いもうちと差出さしだして
城内きやうじやうの者の赦免しやくめんを願ねがひまゝ王おうハこれを見るより眼まなこと怒い
ら一聲こゑを叫こゑびだて汝等なんぢらグ強情かうじやう小籠城ろうじやうせーがたれ小我軍勢わがぐんぜい
の損亡そんずつ一方いほうあゝ重々どうどうの罪つみあるまじかろとて左右さゆうの者
を呼よびこの場ばふて彼等かれらの首くびをまわすと申渡まうしせーがバ旗本はたもと
の面々めんめんあるわろとちやいと始はじめりて貴族きぞくの人々皇太子みやうたいし
でも皆彼みなかれの義士ぎしを憐あはれ何卒命なづかをうまハ赦ゆるし給たまはるべしと
諫いさむまじも更さら小聞きこ入いるべき様ようもなほ

此時英吉利王いぎりぎおうの皇妃陣中かきさねぐんちゆうの見舞みまひりて本國みくにより来きて王おう

の側そば小在こてこの皇妃かきさねハ國王こくおう出陣しゅしんの留守くしう中ちゆう小國こくにの内乱ないらんを平
け蘇格蘭そくらんの君きみをも生捕せいとせーなどの武功ぶくうもなほ且かつこのと
まふ若君わかにきみとも生なまをまバ王おうの最も親おほしと愛あいする所の者ものか
て一いっが最前さいぜんより王おうの怒いき有様ゆうざうを見て連つれ自分じぶん小わづら
まバ彼の助命すけいのちハ叶かなふとぞと思おもひうち王おうの前まへ小伏ふしてくら
小寄よりまがり涙なみだを流ながしてこの度遙々ふたふた海うみを越こへ危あやきをわ
てこの陣中じんちゆう小来きて一いっも唯君ただきみを思おもふて君小仕きみへ奉ほうらんがた
めありまゝ今いま一の惠めぐみを願ねがふも亦無理またふりハハりまゝとぞ
何卒天なんそくてんを敬うやみ慕こを愛あいして彼の六人の者そのむねのむねを赦ゆるし給たまはるを
と云いひいさバ王おうも暫時思案しあんの体ていふりーが黙止もくしし熟うたうし

見へ皇如小向て六く余實ハ今日君ダラく小在らざるを願
ふなりともまじも今君の願とみまばこそ成聞うまされと得ぞ
この囚人ハ君小任とら者ふれば勝手小取計ひ給ふべし
皇妃ハ助命の恵を願取りておの悦あめなりと取敢新
らりと衣服を調へて六人の者の支度を改めさせ共吉利の
陣町を送り出して城内へ返したるを

童蒙をく草卷の五人尾

福

16-1

著作